

## ひふみ神示6 地震の巻き6帖その21

霊界人は、その向いている方向が北である。しかし、地上人の云う北ではなく、中心という意味である。中心は、歓喜の中の歓喜である。それを基として前後、左右、上下その他に、無限立体方向が定まっているのである。霊界人は地上人が見て、何れの方向に向かっていようと、その向かっている方向が中心であることを理解しなければならない。

故に、霊人達は、常に前方から光を受け、歓喜を与えられているのである。それは絶えざる愛であり、真理と受け取られ、それを得ることによって霊人達は生長し、生命しているものである。要するに、それは霊人達の呼吸と脈拍の根元をなすものである。地上人から見て、その霊人達が各々異なった方向に向かっていようと、同じくそれぞれの中心歓喜に向かって座し、向かって進んでいる。上下、左右、前後に折り重なって居ると見えても、それは決して、地上人のあり方のごとく、霊人達には障害とはならない。

各々が独立していて、他からの障害を受けない。しかし、霊人達は極めて綿密な関係に於かれていて、全然別な存在では無い。各自の眼前に、それ相応な光りがあり、太陽があり、太陰があり、歓喜がある。それは、霊人達が目で見えるもので無く、額で見、額で感じ、受け入れるのであるが、その場合の額は、身体全体を集約した額である。地上人に於いても、その内的真実のものは額のみで見得るものであって、目に見え、目に映るものは、地上的約束下におかれ、映像として真実であるが、第一義的真理ではない。

故に、地上人の肉眼に映じたものが霊界に存在するのではない。内質的において同一であるが、現れ方や位置においては相違する。故に霊界人が太陽を最も暗きものと感じて、太陽に背を向け呼吸し、生長しているという。地上人には理解するのに困難なことが多い。要するに、これらの霊人は、反対のものを感じ、かつ受け入れて生活しているのであるが、其処にも、それ相当な歓喜があり、真実があり、生活がある。

歓喜の受け入れ方や、その厚薄の相違はあるが、歓喜することに於いては同様である。歓喜すればこそ、彼の霊人達は太陽に背を向け、光りを光りと感得し得ずに、闇を光りと感得していることを知らねばならぬ。

この霊人達を邪霊と呼び、邪気といい、かかる霊人の住むところは地獄となりと、多くの地上人は呼び且つ感じ、考えるのである。しかし、それは本質的には地獄でも無く邪神、邪霊でもない。霊界においては、思念の相違するものは同一の場所には存在しない。

何故ならば、思念による思念の世界に繋がる故である。現実的にみても折り重なって、この霊人達が生活すると、全然その感覚外におかれるために、その対象とはならない。地上人に於いても原則として同様であるが、地上的、物質的約束のもとにある為、この二者が絶えず交差混交する。交差混交はしても、同一方向には向かっていない。其処日常人としての霊人に与えられない特別の道があり、別の使命があり、別の自由が生じて

くるのである。